

ニッポンの発言



中森 明夫
(コラムニスト)

毎日新聞 15(H27).5.19

1975年、私は15歳で上京した。学生運動の波は退潮して、当時は内ゲバの時代だ。若い奴らがヘタに理想や希望に燃えると、ろくなことにならない。その末路は連合赤軍事件だと。反動で若者はシラケ派に走る。70年代は60年代の残滓のドグマ的な重力に支配され、どこか息苦しかった。

キーワード

柄谷行人の〈希望〉

晴れた。自由になった気がしたのだ。柄谷の「マクベス論」と唯物論に対して、すべては幻想だという岸田秀の「唯幻論」は、当時の知的な若者たちに少なからぬ影響を与えた。それは70年代的な重力からの解放の合言葉だった。そう、「80年代」を準備したのだ。



85年、私は25歳で「新人類の旗手」と呼ばれた。柄谷行人と知り合う。酒場の柄谷は酔っ払ってバカ話をする変なオヤジで、ツッコミを入れる私は、よく怒鳴られた。それでも、少年時代の私を「希望」から解放してくれた人というリスクはあったのだ。

2001年、柄谷の新刊

『NAM原理』を手にとった私は、愕然とする。「希望の原理」の帯文!! 柄谷はNAMという組織を作り、社会変革をめざすという。冗談だろ?と呆れた。

行きつけのバーで柄谷の朗読会があると聞いて、駆けつける。終了後、彼が出てくるのを待った。辻斬りのように、路上で「希望がないから絶望もないんじゃないから絶望もないんじゃないか」と突っかかった。柄谷の顔色が変わった。「中森は絶望がないから、希望がないんだよ」と一喝したのだ。あっ、と思った。なるほど、そうだったのか……柄谷行人は絶望しているのだ。だからこそ、希望を語り始めたのである。

2001年、柄谷の新刊が文春文庫で出た。タイト

ルは『希望』。「行動する人々」の副題を持つ。9・11テロ以後の米国で、90歳を超えたターケルがハーバード大学の若者に逢う。彼らは学食の従業員らの待遇改善を求めて座り込みデモをした。エリート学生らがなぜ?とターケルは訊く。すると若者は自分たちのために働く人々の尊さを知ったという。「ターケルさん、それはあなたの『仕事』という本を読んだからですよ」と。この場面にグッときた。原題は「HOPE Dies Last」(希望は死なない)。そう、希望は21世紀の若者たちへと受け渡されてゆく。

数年、酒場で久々に柄谷行人と遭った。彼は米国に絶望しているといった旨のことを口走った。そんなことは無い、と私は持参していたターケルの『希望』を柄谷に進呈した。このエピソードは気に入っている。

05年、ターケルの新刊

私は柄谷行人に「希望」を手渡したのだ! この国には何でもある。だが、希望だけはない」 20世紀末に書かれた村上龍の『希望の国のエクソダス』の一節だ。日本中の不登校中学生が反乱を起こす近未来小説である。あの物語で描かれた未来に私たちは生きています。かつて「希望」から解放された若者だった私は、今、55歳になつて、若い世代にこの国の大

人たちが語れる「希望」はあるか?と考えている。私もまたようやく「希望」に目覚めて「希望」を語ろうとしているのだろうか? 11年の東日本大震災、福島原発事故以後、柄谷行人が反原発デモに参加して話題を呼んだ。「デモで何が変わるか? デモのある社会に変わるのだ」との発言は賛否両論を呼ぶ。今度、逢うことがあったら、柄谷行人と未来の「希望」について話してみたい。

毎月第3火曜掲載